

クィーンシバ・エチオピア 民族舞踊団の来日

松田 凡

はじめに

エチオピアの高地文化に初めて触れて驚くのは、カイワット（一種のカレー）の辛さともうひとつ、エスクスタというダンスの動きだ。肩をこきざみに激しく振る一方で、頭をまったく動かさないそのダンスは、私たちが目にする人間の動きのなかでも、かなり特異な感じがするものだ。加えて、そのダンスは一流のダンサーだけにできるものではなくて、エチオピア高地人の老若男女だれでもが、私たちにとうていまねできないレベルで踊るので、また驚く。

たとえば、アムハラ人の一般家庭に招かれたとき、まだ年端もいかないかわいい子どもが、ラジカセの音楽に合わせて踊って見せてくれる。その視線の色っぽさとリズムカルな動きにつられて思わず拍手をし、つぎには自分もたちあがって、子どもと向き合って踊ってみるのだが、最初はほとんどさまにならない。その動きのぎこちなさに、場にいわた人たちは大笑いをし、自分も照れ笑いをしながら、それでも、おまえはなかなか筋がいい、と家の主人におだてられて踊り続ける。でもやがて、身体に染みついた文化というものの、容易にはまねできないがんこさに気づいて、まだまだという声をさえぎるようにして腰を下ろす。グラスいっぱい注がれたタッジ（これもエチオピア特有のハチミツ酒）を口に含むと、最初に飲んだときよりうまいような気がしてくる。こうして、アジスアベバのけだるい日曜の午後が過ぎていく……。

エスクスタを踊ることは、エチオピア文化を知るための通過儀礼のひとつだ。とすれば、エスクスタを日本に紹介せずに、エチオピアと日本の文化交流の幕開けはない、という気持ちでおしすすめたのが、昨年（1997年）の「クィーンシバ舞踊団日本公演招聘事業」であった。

計画の立案と準備

この発端は、1996年春ごろにさかのぼる。97年12月に京都で開かれる第13回国際エチオピア学会のための準備会議の席で、福井勝義先生から、国際学会開催にあわせてエチオピア舞踊団の公演があったらいいのではないかという意見が出た。だれが計画を進めるかといういうのはなしになって、筆者の連れ合いである遠藤保子（立命館大学・舞踊人類学）の名前があがった。この案を自宅に持ち帰り、家族会議のすえ、代表・遠藤、事務局・松田で計画を立案してみることにになった。

96年8月に筆者がエチオピアに行った際に、招へいするにふさわしい団体を探した結果、「エチオプスアート・ミュージック・カンパニー」という、ヒルトン・ホテルや国立劇場での公演にダンサーを派遣している団体にはなしをもちかけてみた。代表者のマイケル・メラクは年齢30歳くらい、スイスで11年間教育を受けたのち、新政府発足後（1993年）のエチオピアに戻ったという。頭のなかにちょっと変わった金もうけのアイデアをたくさんかかえた、新しいタイプのエチオピア人男性だった。話しはトントン拍子にすすんで、とにかく連絡を取り合おうということになった。

実は、ここから半年ばかり、筆者の肝炎による入院のため、この計画は頓挫していた。しかし、97年4月に国際交流基金から助成金の内定（ただし渡航費の8割）をもらい、外務省や在日本エチオピア大使館、日本エチオピア協会からも協力をいただけるということで、資金的なめどはないまま、とにかく計画をスタートさせることになった。

この時期に知り合った方々のなかに、画家の伊藤則彦さんがいる。伊藤さんは1938年、広島のお生まれで、河の源流にこだわっているうちに、青ナイル源流のエチオピアにたどりついたという。「文明の風景」をテーマに、イ



【写真】 舞踏団の楽団。右より、ワシント、クラール、ケペロ、マシゴの奏者。



【写真】 公演の一風景。

インド、ネパール、トルコ、そして地中海世界を長年描いてこられた。97年10月に広島で写真家の野町和嘉さん、陶芸家のタスファイエ・ガライヤさんとともに、「人類の平和と文明の原風景画」と題した交流展を催されるということで、われわれの計画についても、いろいろと相談にのっていただいた。また、この交流展に

あわせて、広島市とアジスアベバ市とあいだに、平和のメッセージを交換しあうために奔走されてもいた。まったくの個人的動機から活動されている伊藤さんのお姿を拝見して、われわれも励まされると同時に、国際文化交流とはいいつつ、個人の情熱が支えている現実を思い知らされた。

97年8月には、筆者と遠藤、そして来日公演の舞台監督を任せる予定の池田章子（立命館大学大学院生）がエチオピアに行き、来日メンバーの確定と舞台演出の素案づくりをおこなった。9月に帰国後、日本国内の公演会場との打ち合わせ、宿泊や交通手段の手配、パンフレットやポスターの作成、チケットの販売など、多忙をきわめた。その一方で、資金集めはすすまなかった。しかし、動き出した計画は止めるわけにはいかない。収入がないなら、支出を抑えるほかないということで、個人的な人間関係を総動員して、少しでも安上がりの舞台がつかれる方法、安く泊まれる宿泊所に頭を悩ます毎日だった。

来日メンバー

こうして、11月30日の夜、関西国際空港にクイーンシバ舞踊団一行16人（うち一人は同行記者）が到着した。全員が濃紺のビロードに金刺繍をほどこしたマントを着用し、そのきらびやかな装いに、すれ違う日本人の多くが、つくため息が聞こえるほどだった。宣伝文句としてもちいた「シバの女王が愛した踊り子たち」という表現が、まんざらでもないと思えるほどのあでやかさだった。

以下に、来日したメンバーの簡単な紹介をしてみよう。いずれもアジスアベバの国立劇場や一流ホテルに出演しているプロばかりで、その技術レベルの高さは折り紙つきといっ

ゲテ・アンレイ 1966年ゴッジャム生まれ。
男性シンガー。

アスナケ・ゲブレ 1968年シダモ生まれ。
男性シンガー。

アポネッシュ・アドノウ 1970年ソド生まれ。
女性シンガー。

ハプトウ・ネガトウ 1965年ゴッジャム生まれ。
ワシント（フルート）男性演奏者。

ゼリフン・ベケレ 1970年アジスアベバ生まれ。
ケベロ（ドラム）男性演奏者。

ティガブ・ベレテ 1964年ウォロ生まれ。
クラール（ギター）男性演奏者。

タダセ・ゲブレ 1962年ティグリニャ生まれ。
マシゴ（バイオリン）男性演奏者

フィクレ・ゲブレキダン 1971年ゴンダール生まれ。
女性ダンサー。

エルサ・タスファエ 1967年アジスアベバ生まれ。
女性ダンサー。

ティゲスト・デグ 1969年アジスアベバ生まれ。
女性ダンサー。

マサレット・アラム 1972年エリトリア生まれ。
女性ダンサー。

デレゲ・カサ 1968年アジスアベバ生まれ。
男性ダンサー。

アサファ・メンギステ 1971年ウォロ生まれ。
男性ダンサー。

タスフ・ベルタ 1972年アジスアベバ生まれ。
男性ダンサー。

公演演目

公演の演目は会場によって少しずつ異なっているが、主なものだけ紹介しておこう。エチオピアの新年（マスカル祭）を祝う「アジスアベバ」のセレモニーに始まり、ウォロ、ティグリニャというポピュラーなダンスでまずエチオピアを印象づける。つづく「アンバサル」はエチオピア音楽の代表的なスケールのひとつで、ゆったりとしたメロディーと節回しが、日本の演歌に通じるところがある。 Gumz、グラゲ、ガンベラ、アファル、ウォライタ、コンソといったエチオピアの西部や南部の民族ダンスをあいだにはさみ、アルシ地方のオロモの激しい首振りダンスに、驚きのため息と拍手がおこる。アガウ、ハラル、ソマリにつづいて、ゴッジャム、ゴンダールのエクススタで幕を閉じる。

エチオピアで研究する人類学者として、こうした演目構成に不満がないわけではない。ひとつは、中身がエチオピアの高地文化中心、なかでもウォロ、ゴッジャム、ゴンダールに代表されるアムハラダンスが強調されすぎている点である。エチオピア民族舞踊団といいつつ、実はアムハラ民族舞踊団に等しい。

だが、これは次に述べるもうひとつの不満の裏返しでもある。マネージャーのマイケルは、エチオプスアートではエチオピア国内の諸民族のうち20以上もの地域のダンスが上演可能だと豪語するが、現実には、ダンサーの出

身はアムハラ、オロモ、ティグレ、グラゲに限られており、他の民族のダンスは、ホンモノとはいえない。それどころか、ガンベラのアヌワ人のもので上演されたダンスなど、明らかに、都市に暮らす高地人の差別意識が作り出した創作にすぎない。下品で、猥雑で、野蛮な、嘲笑の対象として演出されたダンスを、「民族舞踊」として紹介することは、ほんとうに心が痛んだ。

ホンモノにこだわればアムハラ帝国主義を許し、多様な民族文化にこだわればニセモノを見せることになるという苦渋の選択は、結局エチオピア大使館の意向もあって後者に決まった。舞踊はいつの時代にも政治宣伝と手を結びあっていた、という歴史的事実を思い出した。

公演日程

さて、日本での公演日程を簡単に記しておこう。まず、12月4日の早稲田大学国際会議場で公演はスタートした。最初の舞台ということで、プログラム内容や会場準備に多くの不安をもっていたが、結果的には大成功、500人以上の観客のなかには、アフリカ諸国を中心に10カ国の在日大使やその関係者、また東京在住の多数のエチオピア人などもいて、たいへん華やかな幕開けとなった。入場料が無料ということはあったにせよ、これほど多くの来場者は予想すらせず、ここまでの道のりを思い返して、まさに感無量という感じであった。

12月6日には大阪の国立民族学博物館において、翌7日は滋賀県立八日市文化芸術会館において公演が行われた。いずれも、白を基調にしたエチオピア中・北部の民族衣装にカラフルな照明が映え、美しさが印象に残る舞台だった。ここからは関西での日程ということもあって、来日メンバーとスタッフのあいだにも、ようやくうちとけた雰囲気が出てきた。

10日は京都の永松記念教育センターで、精神発達障害のある青少年のためのボランティア公演が行われた。これは、エチオプス・アート代表のマイケルが発案し、京都市教育委員

会の協力で実現したものだ。こうした企画も新しい時代の日本・エチオピア関係を予見させるものだと思う。

12日は京都市国際交流会館での公演、そして、13日は第13回国際エチオピア学会のオープニング・パーティーでの披露であった。とくに後者は、ごらんになった方はご存じの通り、立命館大学学生のと太鼓サークル「ドン」とのジョイントコンサートということで、エチオピアはもちろん内外の学会参加者の大喝采を浴びた。最近ではオリンピックなどをみても、そのオープニング・セレモニーの派手な演出が話題になるが、それに勝るとも劣らない(?)出し物だったとの評価を得て、企画者一同、鼻高々だったのはいうまでもない。これが縁で、この和太鼓サークルのエチオピア公演計画が現在進行中である。

こうして15日、全日程を無事終了して、全員が関西空港から帰国の途についた。病気や事故などもなく、元気で連日のハードなスケジュールをこなしてくれたことは、主催者としてなによりうれしかった。

おわりに

今回の計画は、もともと一個人の手にあまる大がかりなものであった。見通しの甘さ、準備の不十分さから、多くのかたがたにご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫びしたい。手伝ってくれたスタッフは文字どおりのボランティアで、また、なによりも、はるばるエチオピアからきてくれたメンバーに、ゆっくりと日本での滞在を楽しんでもらえなかったことも心残りである。

もちろん、多くのかたがたの暖かいまなざしとはげましがなければ、この計画はとうてい実現しなかった。ここにひとりひとりのお名前を記すことはしないが、私はいつでも、そのかたがたの顔をエチオピアの音楽とともに思い出すことができる。ほんとうにありがとうございました。

(まつだ ひろし 京都文教大学
エチオプスアート日本委員会)